

石嶺町のまちづくり

首里地区で最も広い面積と人口を持つ石嶺町。道路拡幅工事や公共福祉施設の整備、モノレールの延伸などハード面の都市整備が進行する一方、青少年育成や地域住民のコミュニケーションを図ろうとソフト面の取組みが活発に行われています。



写真：平成20年11月22、23日に開催された「いしみん村あしび」の様子

地域活動を支える

石嶺北翔会

ボランティア団体・石嶺北翔会（平成五年設立）は、石嶺町内自治会長を相談役に十三名の役員で運営。コミュニケーションを図るためのイベントや清掃活動を行う一方で、人材支援や資金造成など地域活動のサポートも行っています。会員を限定することなく、各イベントや行事毎に広く町民に参加協力を呼び掛けるスタイル。年三回発行している「北翔新聞」で町民へ活動内容を報告し、学校をはじめ公共機関の情報や地元ならではの話題も掲載。石嶺の古写真で綴る「むかし石嶺」は懐かしい風景が楽しめるという好評です。

▶第34号の発行を数える「北翔新聞」

地域活動で人を育てる

石嶺町旗頭保存会
石嶺町伝統エイサー会、子供教室



石嶺町伝統エイサー会の皆さん

誕生から十六年、町のシンボルとなった「北翔」（一番旗）をはじめ、四つの旗頭を持つ石嶺町旗頭保存会のメンバーは男女問わず子供から大人まで総勢二五〇名。旗頭の活動を通し人材育成を目指す会では、技術の継承と共に「あいさつ」と「先輩を敬う心」が大切に受け継がれています。また、百余年の歴史を持ちながら途絶えていたエイサーを、当時を知る人達からリサーチを重ね石嶺町伝統エイサー会として復活。空手の型を基本とした勇壮な舞は多くの人々を魅了し、幼児から大人まで百名近いメンバーが集り、夏の風物詩としても親しまれるようになりました。そして、小中学生を対象とした子供教室では、旗頭やエイサーの体験をはじめ、本の読み聞かせやバーベキュー大会なども開催。さまざまな活動を通して、家庭や学校の枠を超えた地域ならではの青少年育成活動が行われています。



暮らしに必要な店舗も増え活気あふれる北翔通り

石嶺のメインストリート形成を目的に設立された北翔通り会（平成五年設立）は、石嶺三丁目の三叉路から石嶺団地に向かう三百メートルの区間の店舗で形成された民間団体です。商店街活性化や沿道の美化活動を行うなど、二一世紀のメインストリートづくりが着々と進められています。

町内外で大人気のチチバンド



ゆいレール記念式典で演奏したチチバンドの皆さん

石嶺町の地域文化の形成やふるさとづくりに貢献しようとして、平成五年に石嶺町のお父さん達で結成されたボランティアバンドの「チチバンド」。楽しい演奏やトークが話題となり町外からの出演依頼も多く、五年前から始めた寸劇も大好評のユニークなバンドです。

石嶺町周辺マップ



水のある風景

村井戸（ムラガー）
首里石嶺町

子どもたちがざわめき、道沿いのせせらぎが涼しい城北小学校沿いの道を東方へしばらく行くと左手に一際目立つ地域交流の場、本字集会所と記された建物がある。その北隣に歴史を感じさせる石組み造りの大きな井戸がある。この井戸はかつて、正月の産水無で（ウビーナデー）に使う若水を汲んだ井泉であることから産井（ウプガー）であったと伝わる。今ではこの井戸も、近代化の波とともに精神文化が衰退していくなかで、また、上水道の普及によりその役割を終えたのであるうか、コンクリートで蓋をされている。地域の人々が共同井戸の意で「ムラガー」と呼び、人々の精神世界と営みを支えてきた歴史を感じさせながら親しまれている。



▲村井戸（ムラガー）

石嶺町の歴史

資源

石

嶺は、王国時代は西原間切に所属していましたが、大正時代より段階的に首里に編入され、大正末期に石嶺町となりました。中央部にある丘陵地は、王国時代の名家の別荘地として、「御殿山」という地名も残されています。首里で最も人口が多く、活気にあふれたまち、石嶺をめぐる。

※御殿とは、王子や按司家を輩出した琉球の上流階級の家柄のこと。

伊江御殿

伊江家は、尚清王の第七子である朝義を祖とし、代々伊江島の総地頭職として、伊江按司を称していた由緒ある家柄です。王国末期には、尚灝王の第四子尚健（のち伊江朝直）が養子となったこともあり、王家とも深い関わりがありました。明治以降は、男爵の爵位を叙せられました。

伊江御殿の墓

一六八七年に五世朝嘉が造営した亀甲墓。琉球の亀甲墓の原型とされる墓で、国指定文化財となっています。



▲伊江御殿の墓

伊江御殿別邸庭園

墓の西側樹林にある伊江家の別邸庭園。庭園は古い形をよく残し、琉球庭園独特の伝統様式が見られる上流階級の庭園として、国指定名勝に指定されています。二〇〇九年、この庭園は伊江家から那覇市へ寄贈されました。現在、那覇市では庭園整備に向けた取り組みが行われています。

写真：空間をとり奥に池が造られている庭園（建築資料研究社発行「Vol.103庭」より）

伊江御殿伝世品



維新慶賀使一行（前列中央：伊江王子朝直）
（前列中央：伊江王子朝直）
那覇市歴史博物館発行「伊江御殿伝世品展」より

伊江家に代々受け継がれてきた伝世品で、家譜（系図）や辞令書、生年証文などの文書史料となっています。これらは琉球王国時代の職制など上級士族の生活の一端を垣間見る事が出来る貴重な史料として、県指定有形文化財となっています。現在、那覇市歴史博物館に保管されています。



向姓家譜太宗（部分）
伊江家系（系祖（二世）から二世までの家譜）
那覇市歴史博物館発行「伊江御殿伝世品展」より

豊見城御殿の墓



豊見城家は尚貞王の第二子尚経を祖とする家柄で、墓は一八世紀初頭に造られました。

読谷山御殿の墓

読谷山家は尚敬の第二子尚和を祖とする家柄。墓は巨大な亀甲墓として、那覇市指定文化財となっています。



▲読谷山御殿の墓

火立毛跡



火立毛一の碑

一七世紀前半に整備された烽火台のひとつ。烽火台は、沖縄島および周辺島嶼の各地に設置され、船が確認されると火をたいて順次首里まで連絡していました。那覇市と西原町、南風原町の境界に位置し、付近一帯は墓地になっていますが「火立毛一の碑」が現存しています。